

アートワークの作成

「題3章 iPodの使い方」でアートワークの配置方法を説明しました。市販の音楽CDに録音された楽曲にはID3*タグ情報が書き込まれておりません。このためiTunesに楽曲を登録しても、曲名、アーティスト名、アルバム名や歌詞、アートワーク等は何も登録されません。曲名、アーティスト名、アルバム名の登録にはCDDBを利用でき、歌詞についてはLyrcs Masterで、夫々Web上のData Baseを利用することが出来ます。

アートワーク(レコードやCDのジャケット画像)についてはiTunes Music StoreからDL購入した楽曲には画像が埋め込まれていますが、大半の配信サービスでは画像は殆ど埋め込まれていません。ましてやレコードやテープからデジタル変換した楽曲には何もありません。古い秘蔵盤に至ってはデータすらありません。

小生のミュージックソースは古いものばかりでCD化されていないレコードやテープ、FMのエアーチェック、生録、等で画像そのものはありません。「ないものは作れ」…で、レコードジャケットを撮影することにしました。この章では自宅でできる撮影方法を説明してあります。

■撮影機材

1. カメラ

デジタルカメラが便利です。

2. 三脚

カメラをしっかり固定します。

3. レリーズ

シャッターは手で切ると手ブレが発生します。レリーズがなければセルフタイマー機能を代用します。

4. 水準器

カメラと被写体(この場合はジャケット)を水平に設定します。

5. スキャナー

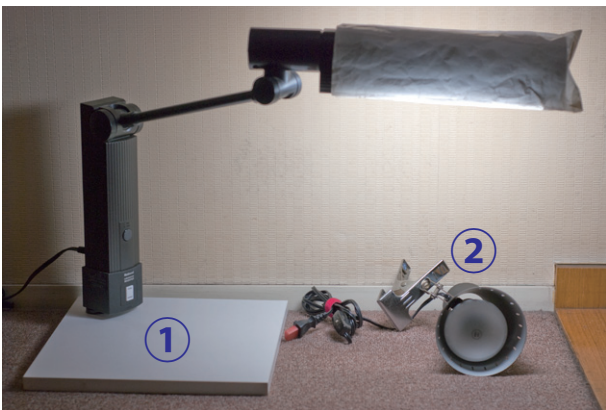
A4用スキャナーがあれば、7" EPレコードやCDは撮影しなくてもスキャニングで代用出来ます。但し、金・銀・蛍光等、特色で印刷されたジャケットはスキャニングには不向きです。金・銀はハレーションが起き、蛍光色は色調がくすみます。

■撮影の準備

撮影の重要要素は「ライティング」、「アングル」と「ピント」です。明るい単焦点レンズが理想ですが、この3要素がそろえばカメラは何でも構いません。画像処理で如何様にも編集出来ます。

1. ライティング

撮影にはフラッシュは使えません。Jazzレコードはモノクロのジャケットが多く、フラッシュを当てるとハレーション(反射)を起こします。室内の蛍光灯と蛍光灯スタンド、レфлекターランプ(白熱灯)を利用することにしました。



撮影用照明器具です。

①ナショナル27W 蛍光灯スタンド× 2本

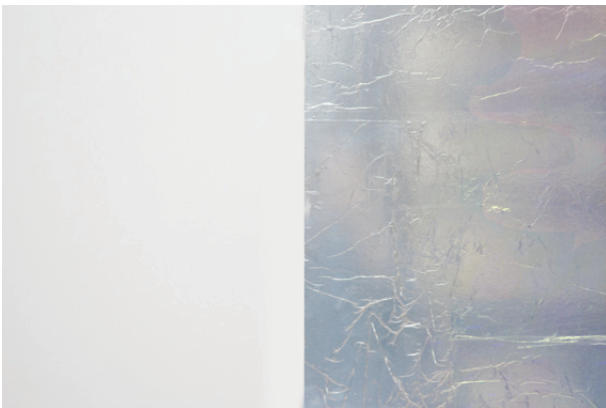
所謂、勉強用スタンドで机に取り付ける仕様です。これでは床に置けないので、例によってスタンドを作りました。

18mm支那合板を30cm角に切り、隅にパイプを立てただけ。これで360°回転出来ます。スタンドのブームアームと併用すれば立体的なライティングが出来ます。

ハレーションが起きる場合はトレーシングペーパーで遮光して光量を調整します。

②ノーブランド/100W レфлекターランプ

工事現場で見かける集光型白熱灯の投光器です。被写体を直接照らすのではなく、天井や壁面にバウンスさせて使用します。蛍光灯と白熱灯は色温度が違うので本当は混合させたくないのですが、印刷用の撮影ではないので我慢します。

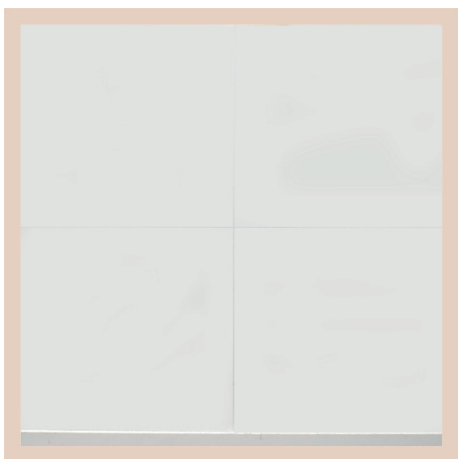


レフ板(被写体に向け光を反射させます)

これは900×600×7mmの糊付きスチレンボードの右半分にアルミフォイルを貼ったものを2枚作りました。

この他にビニール傘(コンビニで売られている透明ではない白いマット調のもの)もあれば便利です。

2. 直立撮影台



ジャケットを立てるスタンドを作りました。
グレーの紙に十文字に罫を引きスチレンボードに貼っただけの簡単なもの。下部にすべり止めを付けました。ここにジャケットを載せて撮影します。



壁際に立て掛けると水平・垂直が出し辛いので、手元にあった譜面台に載せて紐で縛りました。

レコードはJ. J. Johnsonの A Touch of Satin。これは昔、9ピースにいた頃に演った曲。レコードが行方不明になり、USまで捜しやっと入手しました。この中のSatin Dallが圧巻です。とてもトロンボーンのアドリブではない。日本でこれを吹けるのはアローの宗清さんだけでしょう。



× 広角は使わない

複写で広角レンズを使用すると、左の写真のように四隅が湾曲し、中央部が盛り上がります。これを「樽型歪み」といって複写では使い物になりません。複写に使用するレンズは35mm換算で50mm前後の単焦点で明るいものが最適です。6×6や4×5のデジカメがあれば最高ですがとてもじゃないが手が出ません。

小生はニコンの50mm / F 1.8単焦点を使用しています。又、接写には同じくニコンの60mm / F2.8 Microを使用しています。ジャケットの裏面、ライナーノーツ等には限界まで寄れるのでマクロがあれば重宝します。

これで撮影すれば画像からe-Typist (OCRソフト)でテキスト変換出来ます。



✕ 台形

上から撮った画像です。



✕ 逆台形

下から撮った画像です。



✕ 遠近法/右

左から撮った画像です。



✕ 遠近法/左

右から撮った画像です。

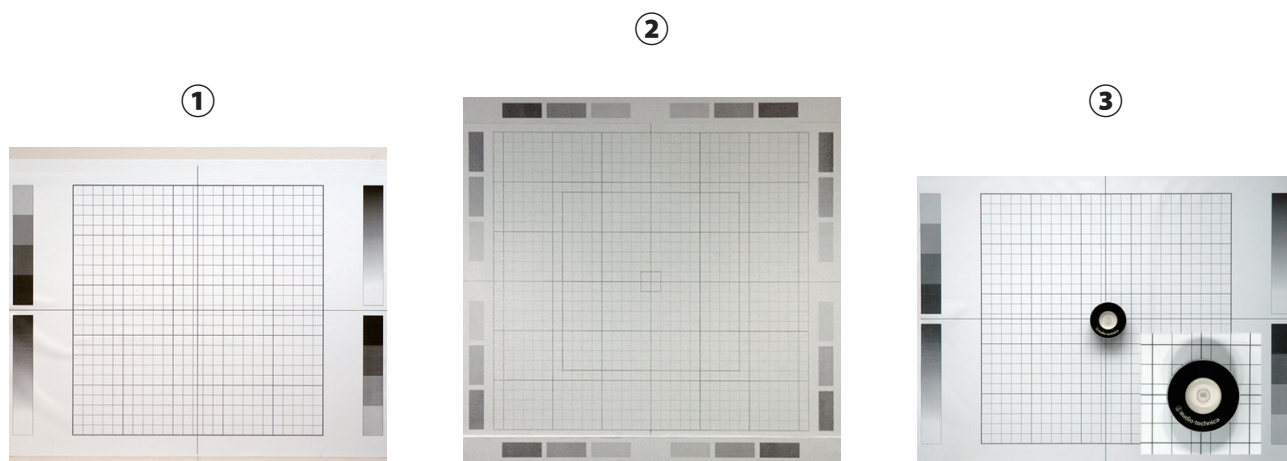
これらは極端な例ですが直立型撮影台で撮ると、天地・左右のいずれかの水平・垂直が狂っています。これの修正は大変な労力です。諦めて被写体を水平に置き、真上から撮影することになりました。

3. 水平位置での撮影/自然光

自然光での撮影の最適時間帯は晴天の午前中と云われています。水平撮影を試すにあたり、拙宅で自然光の射す場所は庭かベランダと、ベランダ向きの部屋のみです。庭に機材を設置するのは恥ずかしいし、ベランダでは上から植木鉢への散水の滴が降ってきますのでジャケットを濡らす危険があります。おまけにアパートは西向きに建っており、ご丁寧にも前には道路を挟んで高層住宅が建っており、12:00～14:00の2時間しか陽が射しません。直射日光はハレーションを起こすので11:00～12:00の間で撮影することにしました。これなら家人も我慢してくれます。

4. 水平撮影台の精密化

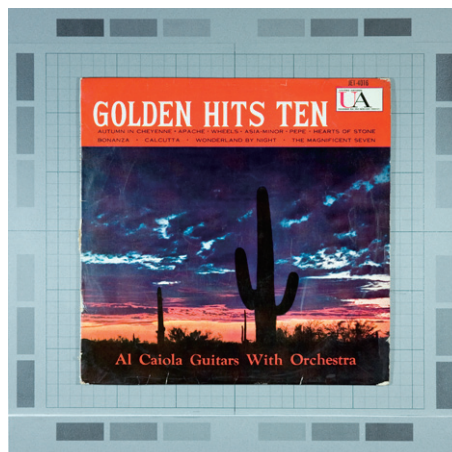
方眼グリッドとグレースケールパターンを、①白紙と、②グレーの両方の紙にプリントし、前回の撮影台に貼り付けた。



③は Audio Technica の水準器で水平を出した図



グリッドの最真ん中にジャケットを載せる。センターの十文字にファインダーのスクリーンを合わせればセンターが一致する。





窓際に三脚を立て撮影台にジャケットを載せると、アルミサッシの影ができることが解った。ここで前に作っておいた「レフ板」を三脚を囲むように設置。これで影もなく均一の明るさが確保できた。



カメラの上に水準器を載せ水平を出す。これで設定は完璧。撮影を始める。
50mmの単焦点レンズで40cm平米を隈無くファインダーに入れるには、被写体との距離が1.5Mになった。小生の身長ではファインダーを覗けないので、脚立を用意する。1カットずつ脚立への乗り降りを繰り返すことになり結構疲れる。

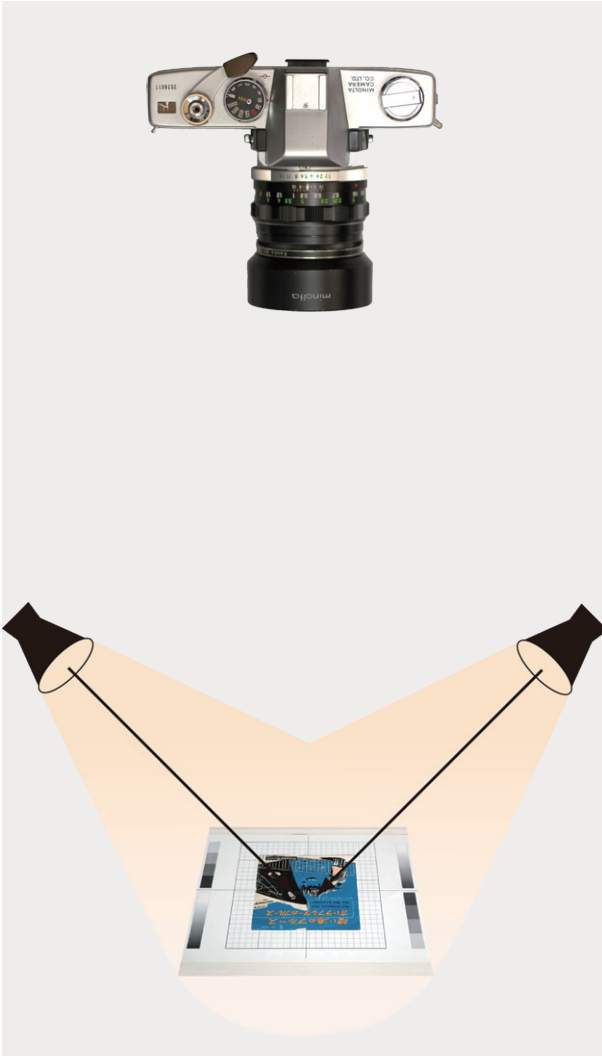


この時のレンズはニコンの単焦点50mm/F 1.2です。昔から憧れのレンズだったがボディーより高く、手がでなかった。今回撮影するに際し、お得意様のご主人(カメラマン)が使っていないのがあるとおっしゃるので、拝借しました。これはデジタルレンズではないので、撮影は全てアナログ。アナログ人間の小生としてはこの方が有難い。毎日曜、午前中で撮影を終え、お返ししました。借用料は手縫いのレンズケースと楽曲データー。レンタルすることを考えれば申し訳なく思います。どうも有り難うございました。Merci beaucoup.



4. 水平位置での撮影/蛍光灯・白熱灯

自然光での撮影は天候に左右され、なかなかタイミングが合いません。気分が向いたときに何時でも撮れる室内での撮影方法は以下ようになります。



❌ フラッシュは使わない

複写にはフラッシュは禁物です。フラッシュを使用するとハレーションを起こします。光量不足で止むなく使用するときには天井にバウンスさせ、被写体に直接光が当たらないようにします。

● 被写体を水平に置く

撮影台が水平になるように調整します。厚紙があれば便利です。

● レンズを被写体と平行に

カメラの水平を取り、撮影台のセンターとファインダーのスクリーンが重なるように調整します。

● ライティングは45°で

影を出さないためには、照明は被写体の四方から45度の角度で上から照射するのが理想です。

4灯を設置するにはブームのスタンドと四畳半程度の空き部屋が必要です。拙宅では不可能なので2灯で間に合わせています。光量不足はレフ板で補えます。

● 撮影はアンダーで

物撮りでは被写体は動かないので、ピント優先でアンダー気味(暗め)に撮ります。後は画像ソフトで好きなようにレタッチ出来ます。明る過ぎてディテールの飛んでしまったものは編集不可能です。失敗しないよう、絞り値を替えて2~3カット撮っておけば完璧です。前頁下段、ブローアの左にあるのがファインダーの拡大鏡です。Minoltaで使ってたのですが、Nikonのデジカメでも使えます。気がつかなかったがニコン製でした。これがあればピント合わせはとても楽です。

■現像

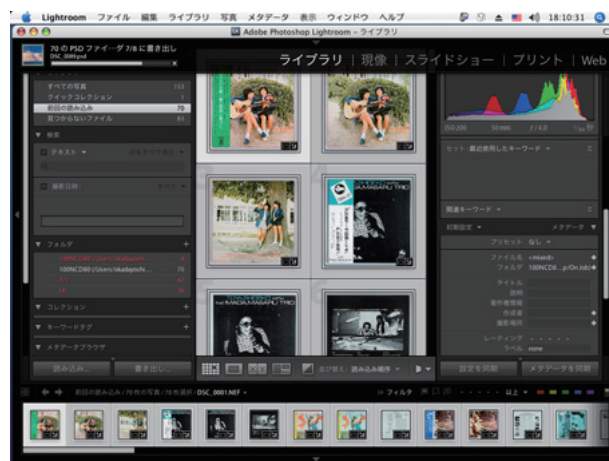
現像とはフィルムを暗室で現像(現像→水洗→定着→水洗)するものだとばかり思っていました。ところが、デジタルカメラになっても画像処理の前段階をこのように呼ぶそうです。最近の高解像度デジタルカメラでの画像ファイルは、モニター用のJPEG形式の他に、非圧縮のRAW形式で保存できる機能を持ったのが標準になってきました。このRAWデータはデジタルカメラのCCD等の撮影素子が取得した電気信号をデジタル化したもので、そのままでは見る事が出来ません。これをパソコンで映像化して画像に変換することを「現像」と云い、この処理に使うソフトをRAW編集ソフトと呼ぶそうです。RAWデータの良いところは「何度レタッチをかけても破壊されない」、「ホワイトバランスが変更できる」、「露出アンダーを補正出来る」等々です。

RAW保存可能なデジタルカメラには各メーカー独自のRAWデータ編集ソフトがバンドルされています。代表的な画像編集ソフトAdobe PhotoshopでもCS 1 (Version 8)以前の製品ではRAWデータを編集することが出来ません。CS 2 (Version 9)になり、Camera Rawというプラグインがバンドルされるようになり、ようやくレタッチが可能になりました。

小生も始めはバンドルソフトを使用していましたが物足りなくなり、Adobe Photoshop Lightroomを発売と同時に購入し、現像に使用しています。小生は写真が趣味ではないので、ここでは概要だけを触れておきます。



↑ RAW データを読み込み現像



↑ 現像済みデータを PSD 画像として書き出し

